

研究分担報告書

インターネット・モニター調査にもとづく若者の自殺に関する大規模調査分析結果とその
意義

～自殺念慮は解消しないのか～

研究協力者 高橋義明 公益財団法人世界平和研究所主任研究員

研究要旨：本報告の目的は、自殺が死因1位である若年層が自殺で命を失うことがないようにするため自殺念慮をいつから抱いているか、自殺念慮を抱かせる原因は何かを把握することである。こうした事項を把握・解明するには同一者を時間経過とともに追跡調査するパネルデータを新たに入手し、統計解析を行う。

方法：本研究で使用するデータの収集は日本に在住する25～44歳を対象としたインターネット・モニター調査をRJCリサーチに委託して2016年2月に実施した。本研究の分析対象者は過去2010年12月および2013年2月に実施した幸福度調査において自殺念慮に関する質問に回答を行った2,514名である。当該データを使用してクロス集計およびパネルデータ分析を行う。

結果：2016年2月時点で「死のうとしたことがある」、「本気で死のうと思ったことがある」と回答した者はそれぞれ5.6%、6.1%であり、2013年2月時点とほとんど変わっておらず、調査3回ともいずれか「あり」と回答した者は全体の5%を占め、念慮を何度も抱く者が一定程度いることが分かった。その調査3回ともいずれか「あり」と回答した者が原因の1位に挙げた項目をみると、家庭問題、経済社会問題が概して全体よりも少ない一方、健康問題が一貫して多くなっている。思い止まった理由をみると、「家族や恋人などが悲しむから」、「我慢して」、「まだ思い止まったとは思わない」が多く、根本的な解決に至っていないことが分かる。特に調査3回ともいずれか「あり」と回答した者は「まだ思い止まったとは思わない」が最も多く、リスクが高いと考えられる。また、パネル分析の結果から配偶者との離婚、死別、裁判での訴訟、そして転勤がともに自殺念慮を抱くきっかけになっていると考えられる。

まとめ：パネルデータの入手と分析から若年層における自殺のハイリスク層の存在を確認するとともに、離婚・死別などの人生上の出来事が自殺念慮を抱くきっかけになっていることが分かった。今後はこうしたパネル分析を若年層以外の高齢者などにも広げ、年代の相違によって要因が違ってくるのかを検討することが重要になっている。今後、日本でも自殺に関連するパネルデータ分析が進展することを期待したい。

A. 研究目的

厚生労働省「平成 27 年人口動態調査」によれば、自殺が 15～19 歳から 35～39 歳の死因 1 位、10～14 歳、40～44 歳、45～49 歳の死因 2 位を占めている（男性は 49 歳まで自殺が死因 1 位）。そのような中、若年層が自殺で命を失うことがないようにするためには自殺に至る過程で自殺念慮をいつから抱いているか、自殺念慮を抱かせる要因は何かの手がかりを得ることは重要となっている。こうした事項を把握・解明する一つの方法として同一の対象者を時間経過とともに追跡するパネルデータの収集・分析がある。しかし、日本ではそもそもパネル調査が限られる上、自殺念慮を調査項目に加えたものは皆無であった。そこで本研究では自殺念慮を調査項目に含むパネル調査を新たに実施し、統計解析を行うこととする。

B. 研究方法

本研究で使用するデータ収集は日本に在住する 25～44 歳を対象にインターネット・モニター調査として株式会社 RJC リサーチに委託して 2016 年 2 月に実施した。本研究の分析対象者は過去 2010 年 12 月および 2013 年 2 月に実施した幸福度調査において自殺念慮に関する質問に回答を行った 2,514 名である（男性 1518 名、女性 998 名）。2010 年 12 月および 2013 年 2 月の調査結果と比較するため、自殺念慮の有無、念慮を抱いた時期、抱いた理由、自殺を思い止まった理由に関する同一の質問を訊ねている。

アンケート調査実施に際しては、筑波大学研究倫理委員会の承認を得るとともに、回答を途中で中止できることや個人情報の利用目的、保護手段、期間などを明記し、同意した者のみ回答に進む形でインフォームド・コンセントを図

った。

C. 研究結果

(1) 自殺念慮の経年比較

「死のうとしたことがある」と回答した者（自殺未遂者）は 2010 年 12 月、2013 年 2 月、2016 年 2 月それぞれ 16.9%、4.9%、5.6%であった。また、「本気で死のうと思ったことがある」と回答した者（自殺念慮者）はそれぞれ 16.8%、6.5%、6.1%であった。一方、両者「いずれもない」はそれぞれ 66.4%、88.6%、88.3%であった。なお、2010 年 12 月時点の「死のうとしたことがある」、「本気で死のうと思ったことがある」の比率が高いのは、他の 2 回の調査が過去 3 年間の対象に質問しているのに対して「10 年以上前」を回答選択肢に含む人生全ての期間を対象とするためである。実際、2010 年 12 月時点の回答を今から 5 年以内に限定すると「死のうとしたことがある」との回答者が 7.4%、「本気で死のうと思ったことがある」との回答者が 7.2%と過去 2 回の回答比率と大差なかった。

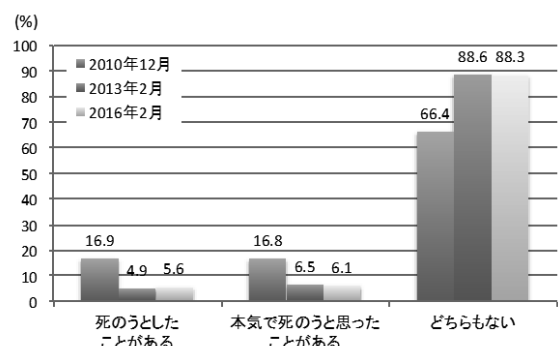


図 1: 自殺未遂・念慮率の推移

それでは 2010 年 12 月に自殺念慮を抱いたことがあると回答した者はその後も念慮を抱いたのであろうか。図 2 は 3 回の調査において同一対象者がどのように回答したかをクロス集計し

たものである。いずれの3回も自殺未遂・自殺念慮を抱いたことが「ない」者が最も多く、全体の61%を占めている。2010年12月時点で抱いたことがあると回答したが、その後の2回の調査では「ない」と答えた者が21%と2番目に多かった。そのうち、10年より前に感じた者が半数近く(48.5%)を占めていた。一方、調査3回とも「あり」と回答した者は5%を占め、三番目に多く、念慮を何度も抱く者が一定程度いることが分かる。その他は13年2月のみが2%、16年2月のみが3%、10年12月と13年2月とも「あり」と回答した者が4%、10年12月と16年2月とも「あり」と回答した者が3%、13年2月と16年2月とも「あり」と回答した者が1%となっている。以上から過去の自殺念慮・未遂を時間を経ても繰り返し抱くことがある者が13%程度いることが分かる。

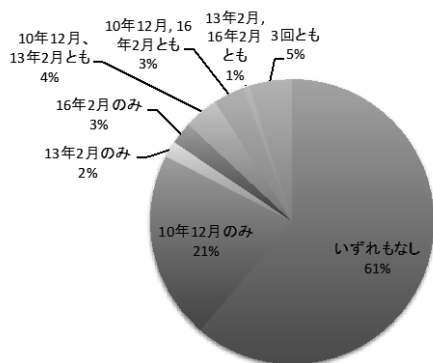


図2：自殺未遂・念慮の持続性

自殺未遂・念慮を感じた時期に関する回答について、2013年2月と2016年2月のそれぞれ時点でみると、2013年2月時点での「いま現在」、「3ヶ月以内」に感じた者のそれぞれ34.6%は2016年2月時点でも「現在」、「3ヶ月以内」に自殺未遂・念慮を感じていた。一方、2013年2月時点で「なかった」者は93.2%が2016年2月時点でも感じていなかった。

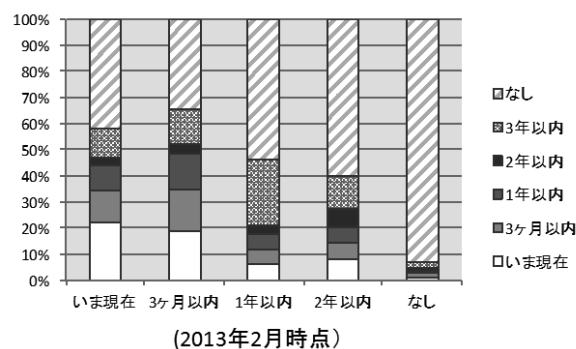
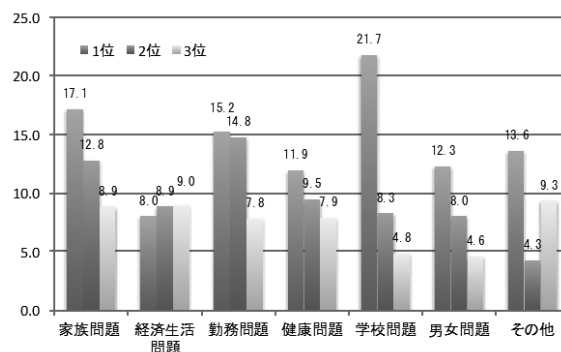


図3：自殺未遂・念慮を抱いた時期

(2) 自殺念慮の原因

自殺未遂・念慮の原因について回答をみると、2010年12月時点では学校問題を1位に上げる者が21.7%を占め、最も多い。家庭問題17.1%、勤務問題15.2%、その他13.6%が続いている。ただし、5年以内に限ると1位を上げる者は勤務問題が19.6%と最も多く、健康問題と家庭問題が18.3%と続き、学校問題は6.0%に過ぎない。2位も勤務問題(18.5%)、家庭問題(13.9%)、健康問題(12.3%)が多いが、経済生活問題(12.5%)も3番目に多い。つまり、学校問題は10年以上前の時期に自殺念慮を抱いた主な原因となっている一方、最近では勤務問題が主な原因となっていることが分かる。

①通期 (n=846)



②5年以内 (n=367)

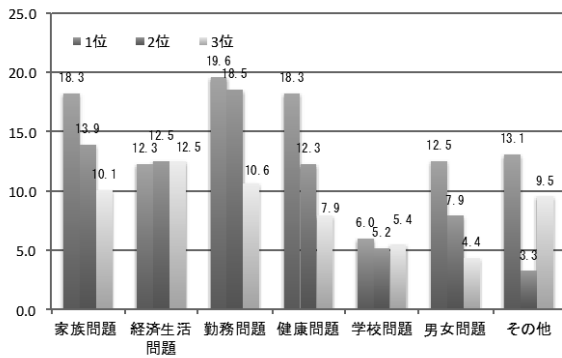


図4：自殺念慮の原因（2010年12月時点）

2014年2月時点の状況を見ると、1位は家族問題が24.7%と最も多く、経済社会問題（20.6%）、勤務問題（16.4%）、健康問題（14.6%）と続いている。2010年12月（5年以内）と比較すると家族問題（1位：18.3%→24.7%）、経済社会問題（1位：12.5%→20.6%，2位：12.5%→24.4%）が多くを占めるようになっている。

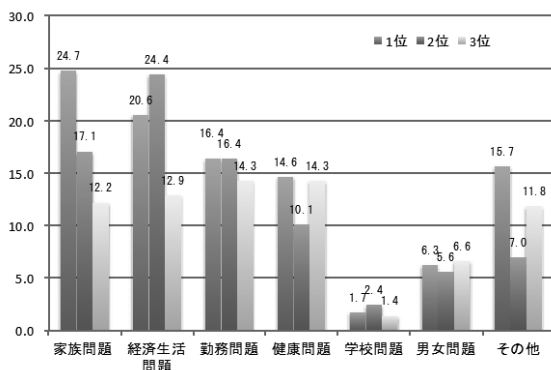


図4：自殺念慮の原因（2013年2月時点）

2016年2月時点の状況を見ると、1位は家族問題が28.9%と最も多く、勤務問題（22.0%）、経済社会問題（18.5%）、その他（15.0%）、健康問題（12.5%）と続いている。2013年2月と比較すると経済社会問題を1位に挙げる者が20.6%から18.5%に減る一方、2位に挙げる者が24.4%から30.0%に増えている。

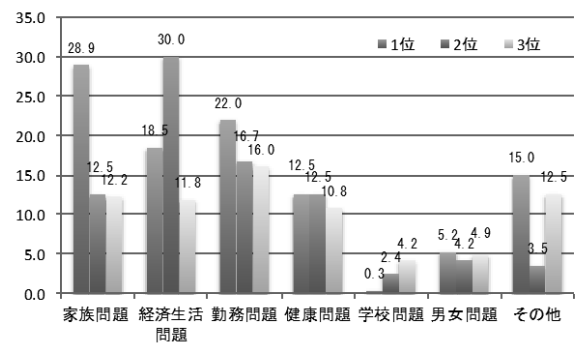


図5：自殺念慮の原因（2016年2月時点）

調査3回ともいずれか「あり」と回答した者（n=90）が原因の1位に挙げた項目の推移をみると、全体よりも家庭問題、経済社会問題が概して少ない一方、健康問題が一貫して多くなっている（2010年：18.3% vs 20.0%、2013年：14.6% vs 20.0%、2016年：12.5% vs 17.8%）。

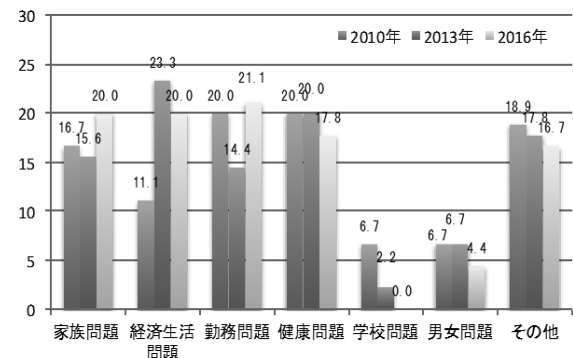


図6：自殺念慮の原因（3期とも自殺念慮あり）

次に思い止まった理由をみると、「家族や恋人などが悲しむから」（2010年：25.1%、2013年：29.3%、2016年：31.3%）、「我慢して」（2010年：19.6%、2013年：36.6%、2016年：26.2%）、「まだ思い止まったとは思わない」（2010年：18.5%、2013年：28.6%、2016年：26.5%）が多い。根本的な解決に至っていないことが分かる。2010年、2013年、2016年時点全てで自殺念慮を抱いていた者でみる（図8）と、「まだ思い止まったとは思わない」が2010年35.6%、

2013年43.3%、2016年41.1%と最も多い。回答傾向からもそれらの者は自殺リスクが高いと考えられる。「我慢して」、「家族や恋人などが悲しむから」が続いている。

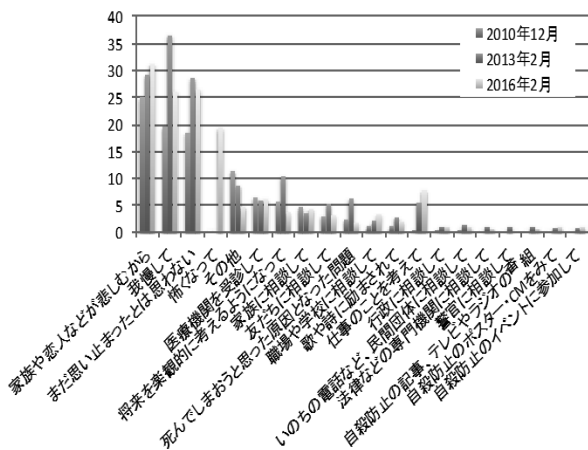


図7：思い止まった原因

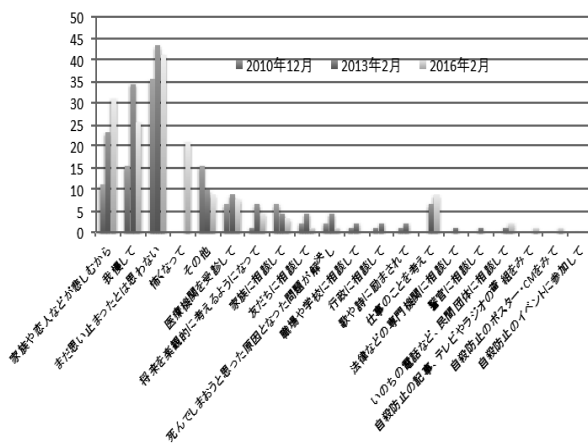


図8：思い止まった原因（3期とも自殺念慮あり）

（3）自殺念慮の想起に影響を与える人生上の出来事

調査では人生上の様々な出来事を聞いている。具体的には結婚、配偶者との離別、死別、引越、転勤、資格取得、失業、入院、交通事故、窃盗被害、強盗被害、詐欺被害、消費者被害、裁判所への訴訟、親の死別、家屋損失である。これら人生上の出来事が自殺念慮を抱ききっかけになったのかを検証したい。そこで人生上の出来事の他、経済要因として世帯収入と仕事満

足度、身体・精神要因として健康を説明変数に加えてプーリング推定モデル、固定効果モデル、変量効果モデルの3種類で分析を行った。結果は表1の通りである。プーリング推定モデルと固定効果モデルのモデル選択に用いるF検定の結果、帰無仮説が棄却された（F値1.1585, $p < .001$ ）。固定効果モデルと変量効果モデルのモデル選択に用いるハウスマン検定の結果、帰無仮説「モデルの係数に差がない」が棄却されない（ $X^2 = 6.1007, p = 0.2965$ ）。以上からランダム効果モデルが最良と考えられる。その結果、配偶者との離婚、死別、裁判での訴訟、そして転勤がともに自殺念慮を抱ききっかけになっていると考えられる。

D. 考察

本研究のパネルデータを分析することにより、何度も自殺念慮を抱いている者がいることが分かるだけでなく、クロスセクションと自殺念慮を何度も抱いた者の回答の差を比較することにより「まだ思い止まったとは思わない」という消極的な理由が自殺を思い止まった理由であることが明らかになった。自殺念慮の経年的把握は自殺のハイリスク層の特定に有効だと考えられる。

一方、3期6年のパネルデータ分析により配偶者との離婚、死別、裁判での訴訟、そして転勤が自殺念慮を抱ききっかけになっていることが分かった。自殺者に単身が必ずしも多くないことと整合的であり、家族関係や仕事関係の変化やそれに伴う争いごとなどが人々の生きる力に影響を与えていると考えられる。離婚、死別はプライベートなことではあるが、近隣住民や自治体も知りうる事実であり、こうした層のこのサポートが必要な場合があることを理解

しておく必要がある。

ってくるのかを検討することが重要になっている。今後、日本でも自殺に関連するパネルデータ分析が進展することを期待したい。

E. 結論

パネルデータの入手と分析から若年層における自殺のハイリスク層の存在を確認するとともに、離婚・死別などの人生上の出来事が自殺念慮を抱くきっかけになっていることが分かった。今後はこうしたパネル分析を若年層以外の高齢者などにも広げ、年代の相違によって要因が違

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表 なし

H. 知的財産権の出願・登録状況 なし

表 1 : パネルデータ分析結果

	プーリングモデル		固定効果モデル		変量効果モデル	
(定数項)	0.1668	(0.0210) ***	-		0.1668	(0.0213) ***
世帯収入	0.0000	(0.0000)	0.0000	(0.0000) *	0.0000	(0.0000)
死別	0.3182	(0.1229) **	0.4049	(0.1980) *	0.3206	(0.1225) **
近隣との関係	-0.0071	(0.0041) +	-0.0030	(0.0086)	-0.0068	(0.0041)
仕事満足度	0.0044	(0.0079)	-0.0040	(0.0174)	0.0041	(0.0080)
転勤	0.0565	(0.0301) +	0.0609	(0.0582)	0.0549	(0.0302) +
資格取得	-0.0145	(0.0256)	0.0768	(0.0469)	-0.0114	(0.0256)
入院	-0.0046	(0.0336)	-0.1114	(0.0625) +	-0.0084	(0.0336)
配偶者との離別	0.2259	(0.0691) **	0.0466	(0.1126)	0.2167	(0.0688) **
裁判所訴訟	0.1546	(0.0930) +	0.1572	(0.1359)	0.1553	(0.0926) +
自宅損失	0.0301	(0.1180)	0.2761	(0.1663) +	0.0496	(0.1174)
健康	0.0085	(0.0060)	0.0006	(0.0144)	0.0083	(0.0061)
修正R二乗	0.0067		-2.002		0.0044	
F値	2.9779		1.9727		2.6618	
p値	0.0001		0.0277		0.0021	